東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（二）

－昭和36年版『東北大学附属図書館別置本目録　増訂稿』刊行まで－

大　原　理　恵

はじめに

昭和36年度版『東北大学附属図書館別置本目録　増訂稿』は、昭和11年発行の『和漢書別置本目録　未定稿』[1]に、狩野文庫９点その他62点を増補、また新たに洋書100点の別置本を加え、記述にも改訂を施したものである。昭和36年度版目録は、『全国国立大学所蔵貴重図書目録』（広島大学附属図書館 1973年）にも再録され、長く利用されることとなった。

> 昭和十一年、常盤雄五郎氏等、和漢書別置本目録を編し、館より印行せらる。（中略）此目録、要を得て頗る便利なれど、我国に於ける漢籍の目録の常として宋元本中には版式を誤れるあり、旧蔵者の鑑定を重んじたる故もあり。今、昨年の実査を基にして、近時の再査によって之を訂し、此目を作る。
>
> 「東北帝大附属図書館漢籍貴重書目録」長澤規矩也
>
> （『書誌学』第17巻第１号　昭和16年８月　『長澤規矩也著作集』第四巻　汲古書院　昭和58年所収）

昭和15年、長沢規矩也氏が東北帝国大学附属図書館の書籍を調査し報告している。その冒頭において昭和11年版別置本目録について特色と問題点を簡明的確に指摘しているのが上の引用である。この長沢氏の調査により、数点の資料が別置されている。長沢氏はその後も東北大学附属図書館とは、さまざまな関わりをもつことになる。

昭和36年度版目録において増補された狩野文庫以外62点のうち38点は一括して受け入れた古写経のコレクションである。追加分の和漢書別置本は、末尾一覧表に示したが、この点数は意外に多くはないと思われるかもしれない。

別置本選定の前提となる東北大学の集書活動については、前稿では狩野文庫を主としたので、本稿ではその他の書籍について、昭和11年以前にも遡ることになるが、記述しておくこととした。もとより、多彩なそれらについてここに網羅的記述をすることはできないが、主要なもの特に貴重図書別置本に関連するものをとりあげ概観することにする。

昭和11年の目録刊行後、戦争・敗戦後の大学の改革等、混乱の時期が続いたが、そうした中で目録改訂や典籍保全の作業が続けられた。平常時でさえ典籍の保管には努力が必要であるが、戦時中のそれは並々ならぬものがあったであろう。それらの活動についての記録・記述のいくつかをとりあげることとした。

昭和36年度版目録の「はしがき」に「本目録は、別置場所の関係上、つとめて前例に従い、分類体裁その他すべて前回の目録を踏襲した」とあるように、一瞥しただけでは区別がつかないほどそれは昭和11年『和漢書別置本目録』に似ている。しかし、詳細に見るならば、字体・記述方法等、細かに検討し直されたことが確認できる。本稿では刊行に至る事情を記すこととし、その具体的な内容については、別稿を用意する予定である。

仙台の風景－東北帝国大学の集書活動－

長年本館の古典籍の整理にあたった矢島玄亮氏は「本館古典中、目立って類書の多い部分は、(1)・易類、(2)・シナ地誌類、(3)・詞曲小説類、(4)・シナ法制類である」[2]としている。矢島

氏の記述等によるならば、(1) 易類は北条時敬[3]（東北帝国大学総長　在任大正２年５月 - 大正６年８月）、(2) 中国地誌[4]類は曽我部静雄（東北帝国大学教授・東洋史）、(3) 詞曲小説類は青木正児（東北帝国大学教授・中国文学）、(4) 中国法制史類は東川徳治[5]によるものと推定される。東川徳治氏は、狩野文庫整理の際主任[6]を務めている。

(1) は狩野文庫と同様、優れた集書（長谷川泰旧蔵書）の散逸を惜しみ購入したものである。

又蔵書は先生〔長谷川泰〕が亡くなつてから散すのも惜しいから纏めて何処かへ世話して貰ひたいといふので、私と横尾さんと二人で、其の時分北条時敬さんが東北帝大の総長をなさつて居られた時、北条先生とは懇意でもあつたから、早速御話した処買つてもよいといふので、長谷川さんへ話しましたら幸に相談も出来て買取りました。処が急に学校に予算がそれ丈けは無いといふので兎に角買取つてしまつたものを、今更しかたがないので、長谷川先生が特に熱心に御聚めに成つた老荘と周易に関する物を、全部東北帝大へ納めまして残りは市で処分する事に成りました。

「先代琳琅閣とその周囲」斎藤兼蔵（琳琅閣）

（『紙魚の昔がたり』反町茂雄編　臨川書店 昭和53年　訪書会叢書第１編（訪書会昭和９年刊）の複製）p35

『易纂言』（宇10-1183）『易学開物』（延3-1407）などはこの集書から別置本（貴重図書）に選定されたものである。(2)～(4) は研究資料としての購入であり、これは大学における蔵書購入の動機としては最も基本的なものであろう。集書が一括して別置本となったのは富樫廣蔭叢書（宇11-1283・87冊）で、山田孝雄（東北帝国大学教授・国語学）によって購入されたもの[7]ということである。

一度海外に流出した書籍の買い戻しも行われた。留学した教員たちが、海外で和本を見て、故国に戻したいとの思いに駆られることもあったであろう。『平家物語』（宇10-1113・下村時房刊）は『和漢書別置本目録　未定稿』（昭和11年）に「英京倫敦ヨリ将来」との記述がある。

東北大学附属図書館本館の特殊文庫には、狩野文庫・漱石文庫のように図書全体をまとめて別置保管するものと、分散配架する第二特殊文庫（『東北大学五十年史』p1730）とがある。分散配架されているため、一般の利用者には存在が知られていないものも多いが、第二特殊文庫から別置本に選定されたものをあげてみよう。『論語』（宇10-1115・要法寺版）には「小牧博士遺書」の印があるが、これは小牧昌業[8]の旧蔵書である。『新後撰和歌集』（延4-1942・庭田重経写）等は「三矢氏蔵書之章」の印があり、三矢重松[9]の旧蔵書である。小野文庫は福島の医家小野隆庵（常建）[10]旧蔵書（稿本等を含む）で、別置本に選定されたのは本館の蔵書としては珍しい植物標本である（『物産目録』延3-1338・『物産草木葉』延3-1339・『采摘艸木篇』延3-1340）。

少数ではあるが、「作成した」貴重資料もある。『臨顧愷之女史箴巻』（延4-1505・大正12年小林古径・前田青邨模写・昭和36年『別置本目録』収載）は福井利吉郎（東洋芸術史）が模写を依頼したものである。また、青木正児は『北京風俗図譜』（延 -1508・昭和36年『別置本目録』未収載）の作成を企画[11]している。

仙台関係資料も割合としては多い。柳田国男は地方資料の散逸のしやすさを嘆いて、例として仙台の場合を挙げている。

明治二十何年かに仙台の学者たちが、郷土文学の展覧会を催した目録が版になつてゐる、それには一々所有主の氏名がかゝげてあるが、二十余年をへだてゝ再び之を歴訪して見ると、依然として故の家に持伝へたものは十の三にも達しなかつたと『仙台叢書』発起者の一人常盤君が私に話した。

「郷土叢書の話」柳田國男　（柳田國男全集７　筑摩書房1998年）P379

（初出『岩手日報』大正15年９月20日―10月８日連載）

文中「常盤君」とあるのは常盤雄五郎氏[12]のことであろう。常盤氏は、仙台の郷土関係書の出版に尽力した伊勢斎助について「平生郷土ものの編集に専念して、ほとんど余念がなかつた。」[13]

「翁は、ある本を出版せんとすると、先ずその出版費に当てるため、秘蔵の高価になりそうな本や品物を手放した。（中略）この方法で他に譲渡された本の一部が、現に東北大学図書館に別置本として秘蔵されてある」[14]と述べている。常盤氏が資料名を示しているのは、『伊達家記録』（延2-1331）・『原田甲斐宗輔手簡』（延4-1961）・『蘆東山手簡』（延4-1962）・『御用鑄錢場圖絵』（延4-1502）で、『御用鑄錢場圖絵』（常盤氏は「石巻鋳銭場図会」とする）以外は別置本目録にも伊勢斎助旧蔵との記述がある。そのほか『多賀城碑考』（延2-1323）は伊勢斎助の編である。

仙台関係の資料の収集には、こうした篤志家の好意のほか、地元の古書肆の働きによるところも大きかった。例えば常盤氏は「無一文館」という名物本屋を挙げる。

無一文館主は、本名を末永勇四郎という。東一番丁今の三浦食堂の辺にあつた古本屋である。

『本食い蟲五拾年』常盤雄五郎　仙台昔話会　昭和31年「無一文館」 p322

東北帝国大学は、（中略）大正十一年八月、法文学部が佐藤丑次郎博士を中心に開設され、当時斯学の有名な先生が選ばれてその教授として就任するに至つて、俄然無一文館が有名となつた。阿部次郎・小宮豊隆・村岡典嗣・武内義雄・岡崎文夫・山田孝雄・青木正児等の好書家の教授連が次々と彼の店を訪れるようになつた。これからが彼の得意時代である。彼の店はこれらの有名教授達の小集会場の観があつた。良本が入手すれば、大学図書館又は各教授個人の買上となつた。彼も亦良書の蒐集に一生懸命努力した。

同上 p325

現在東北大学図書館蔵の別置本中の狩野文庫を除く郷土関係の貴重書は、多く彼が納入したものである。（中略）この林〔鶴一〕館長時代に、多くの貴重な郷土文献が購求せられ、これを納本したのが無一文館の彼である。其の後も数々の重要な郷土文献を納めて居る。　同上 p328

しかし、東北帝国大学の活動は仙台の地域資料を集めるには時期が少し遅かった。すでに、旧家所蔵の書籍は大量に流出し、主要なものは仙台から失われていたらしいのである。

大正の初期は、仙台城下にもまだ〳〵昔ながらの旧家が依然として存在した時であつたから、町を歩く紙屑屋は、本の良否に区別なく反故として買入れ、古本屋などへ持込んだものである。（中略）今では想像も及ばない程の立派な本類が、続々と昔の士族の家から払出され、屑屋は喜んで買取つて来たのものである。　『本食い蟲五拾年』 p323

私が移住したころには、もうこれ等のうちの目ぼしいものは大分東京に持ち去られて、品物の払底を告げつゝあつた時代であるといふ話であるが、それでも古書や書画などに時として思ひがけぬ物が出て来て、さすがに大藩のあとだと思はせるものがあつた。

「地方資料の蒐集」（阿部次郎全集第十三巻　角川書店　昭和37年６月）p19

（初出『河北新報』昭和４年５月１・２日）

阿部は、仙台関係の資料収集に熱意を持っていた。その成果は附属図書館にも残されている。

始めのうちは仙台の町そのものに親しみを持てないのに弱つた。何所となく荒廃の雰囲気が漂つてゐて、読書と思索とに倦んだとき、積極的に私の鬱を散じ心をひき立てゝくれるものを発見することが出来なかつたからである。（中略）しかし仙台は思ひかけなかつた迂路を通つて、今漸く私の心の扉を敲き始めた。過去の仙台に対する尊敬と興味とが次第に私の心に根を卸しつゝあるのである。古本屋と骨董屋とが、仙台に対する愛をさましてくれた。私の夕暮れの散歩の目標はいつでもかういふ店の店先である。

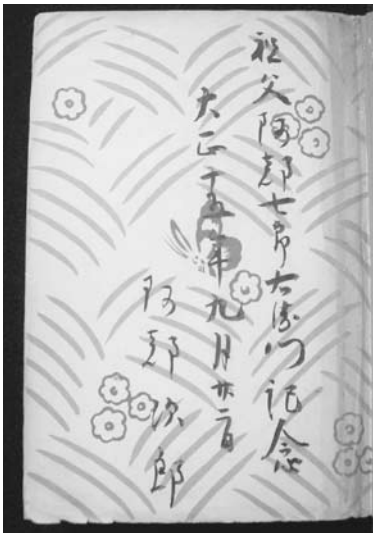
同上 p18

この文章には、別置本に選定された『詩識名』（宇11-1190）の購入事情が詳しく記されている。

櫻田欽斎が私の注意をひき出したのはＢ書店で稿本「詩識名」を買つてからである。それは詩経中に出て来る鳥獣草木虫魚を考證図解したもので、殆ど出板して差支ない程度に整頓したものである。丁度亡父の記念に大学の図書館に寄付すべきものを考へてゐたところであつたから、これを求めて「著述の志

あつてこれを果たさざりし」亡父の記念に寄付した。　同上 p24

『詩識名』には「著述の志ありて　著述の志を果さゞりし　亡父　阿部富太郎の記念に　昭和三年十一月廿二日　阿部次郎」と記した紙が添えられている。また普通書であるが『近松全集』（藤井乙男校注　大阪　朝日新聞社　丁 B1-18-1-4）には「祖父阿部七郎右衛門記念」と書き添えられ【写真】、『清河八郎手簡』（十一月廿三日〔清河〕正明より良佐敬助宛・巻子103）には「亡祖母阿部和歌乃記念　昭和十年九月廿三日　阿部次郎」と記した紙が箱に貼られている。親族の記念を大学の蔵書に留める行為は、必ずしも共感を以てのみ受けとめられるものではないかもしれないが、当時はこうした「私」もゆかしいことと受け止められたのであろう。阿部は別の文章にも仙台の現状への不満と古書への愛を述べている。阿部は大学のみならず、その所在する都市にも活気を求めた。その考えからすれば、仙台は満足できる都市ではなかった。



『近松全集』（東北大学附属図書館蔵）

七年前に赴任した当時は、このさびしさがなほさら劇しかつた。今の仙台にくらべても、当時の仙台は荒廃の気が特に鼻を撲つものがあつた。間に合ふだけはおっつけて置かうとする気風が私の気を腐らした。

「仙台の七年」阿部次郎（五、十二、一九）（阿部次郎全集第十巻　角川書店　昭和35年10月）p97
（所収単行本『秋窓記』岩波書店　昭和12年10月初版）

街の散歩は、東一番丁と名づけられる、小売店の立ちならぶ一筋道を、行つては又もどるより外に行き場がない。そこにある無一文館といふ古本屋が、我々の仲間の唯一の立寄り場である。（中略）かくて我々の生活はおのづから書斎と郊外散歩とに局限される。　同上 p98

「地方資料の蒐集」と「仙台の七年」は、近い時期に書かれ同様の内容が記されているが、前者は仙台の住人に後者は他の地域の人々に向けたものと思われ、その調子には明確な違いがある。仙台の何がこれほどまでに強い「荒廃」の印象を与えたのか、雰囲気などは事実のみからは明確にし難いものであろうが、阿部やその同僚たち大学教員が現在住む地に寂寥感または不満を抱き、古書肆やそこに伝えられた「過去」の蓄積を慰めとしたことは、大学と地域との関わりについての一つの典型ともいえよう。それは学術としての地域研究と単純に同一視はできないであろうが、大学に学術資料を蓄積する効果があったことは確かである。

一方、昭和18年に東北帝国大学に赴任した桑原武夫は、仙台の「過去」に対する不満を表明している。

私は着任早々、伊達政宗と呼び捨てにして、こわい顔をされたことがある。友人に話すと、そんな物言いをしては、ここはぜったい通用しないよ、「藩祖公」と呼ばなければいけないのだと教えてくれた。私はもともと、この頑固のようで利にさとく、強敵には頭を下げる田舎大名が好きではなかった。（中略）漢籍にしても、小藩ながら米沢のほうがよほどすぐれたものを集めていたはずだ。学者も、そんなにえらい人は出ていないと心中に思っていた。そういうところは私は仙台を好きでない。

「仙台の五年間」（桑原武夫集　7　岩波書店　1980年10月　P419）
（初出『仙台あ・ら・かると』Q の会編　宝文堂　昭和43年）

漢籍や学者に対する評価はさすがに厳しい。桑原は、東北という地域でフィールドワークを行い文化活動にも励んだが、この文章を文字通りに受け取るならば、阿部とは対照的に仙台の「過去」には愛着がなかったことになる。

第二次大戦前後の状況

昭和15年法文学部小宮豊隆教授が附属図書館長[15]となった。夏目漱石の愛弟子であった小宮館長は、懸案となっていた漱石の旧蔵書の保管を東北大学附属図書館で行うよう取り計らった。これは一種の疎開でもあった。漱石文庫は、現在は全体が一括して貴重図書として扱われているが、当時は一部の自筆資料だけを別置本としていたようである。矢島文庫の昭和11年『別置本目録』には、漱石文庫からの別置資料一覧表（「漱石文庫中別置本　昭和十九、二、七、調」）が挿入されている。ただし、漱石文庫受入当時学生であった原田隆吉氏は昭和19年の漱石文庫の利用条件を次のように回想する。

> 図書館の大閲覧室の、メインカウンターに一番近い席に「漱石文庫図書目録」が置かれていた。手頃の大きさの冊子で誰でも手にとって読むことができた。洋書が随分多いなと思った。館長の特別許可を得て所定の場所に於てでなければ閲覧できない、と書いてあった。（中略）〔漱石文庫ノ〕会計上の受入れが、19年３月とされているので、（中略）19年の８～９月頃に目録が作成提供されたものと思われる。とすれば９月に軍隊に入った学生にとっては、
>
> 「東北大学附属図書館「漱石文庫」の成立」（『原田隆吉図書館学論集』雄松堂1996年）p475-476
> （初出『図書館学研究報告』第９号　1976年）

閲覧に館長の許可が必要であり、閲覧場所も指定されていたのであれば、（少なくとも学生に対しては）実質上貴重図書としての扱いをしていたということになる。上記漱石文庫別置本一覧表中で「館長整理中」との記述があるのは、煩雑な身辺資料は小宮館長自らが手許において整理にあたっていたのではないかと推測される。なお、『狩野文庫特別本目録』（昭和拾年参月弐拾弐日）[16]には、『能仕舞手引附謡要極祕傳抄』（狩野文庫5-17106-8）に小宮館長指示として鉛筆で末梢の書込がある。当時の別置本・特別本の指定・指定解除は館長指示というような比較的簡略な方法も行われていたのであろうか。

第二次世界大戦末期の混乱状況のなかで、疎開の意味をかねた図書購入が漱石文庫の他にも行われた。洋書等の購入が困難になっていたので、予算は比較的余裕があったのである。

> またこの期間中、重要な特殊文庫を加えることができたのも、一面時局の影響によるところが少くない。洋書の輸入は殆ど杜絶の状態となり、一方国内出版物も印刷用紙などの統制で発行が制限されて、勢い図書購入費に余裕が生じる結果となつた。ケーベル文庫・第二次狩野文庫・漱石文庫・和田〔佐一郎・法文学部経済科教授〕文庫などが、昭和十七年から十九年にかけて、いずれも三月の年度末に購入されているのはこの間の事情を物語るものであろう。　『東北大学五十年史』p1703

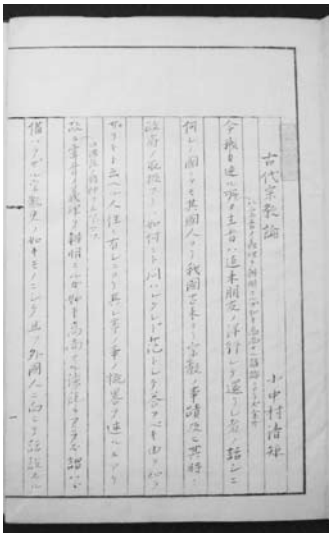
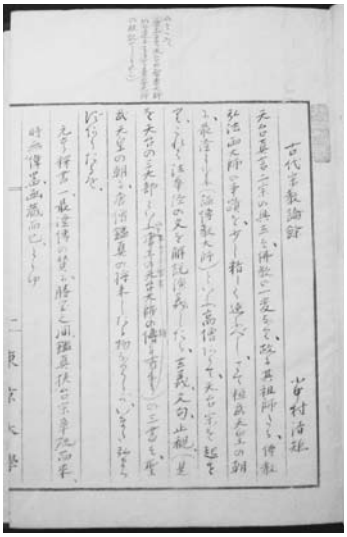
この時期は所蔵者側でも典籍・古文書等の受入先を探していたという事情があった。たとえば、京都の古書肆ではそうした大量の典籍類を扱い、東北帝国大学が受け入れたこともあった。

> ただ商品は、疎開騒ぎで蔵書や古文書を処分しようとするものが続出して、受け入れるのに困る状態であった。時には、まとまった大きな文書を一括処分したいというものが出てきたが、幸いに東北帝国大学などが引き受けてくれて、処理した場合もあったようだ。
>
> 『東西書肆街考』脇村義太郎著　（岩波新書 黄版87）岩波書店1979年　「京洛書肆街考」p54

混乱の時期であったが、昭和20年１月27日付「別置本目録追加」が謄写版（１枚）で作成されている。この昭和20年追加目録に含まれている資料（末尾付表参照）の内、『古代宗教論』[17]（小中村清矩）は、36年度の別置本目録には収められていない。矢島文庫昭和11年『別置本目録』に挿入されている追加目録には、矢島氏のものと思われる注記「但し取り消しか――カードは取消」があり、線で末梢している。

追加別置本のうち『西廂記』『皇明輿地之図』は長沢規矩也氏の、『本草綱目』は岡田要之助（東北帝国大学理学部教授・植物学）の推薦により選定されたものである。矢島氏は、狩野文庫から「明板の60巻36冊本〔狩野文庫　8-21595-36〕を別置していたが岡田先生の研究[18]で入替えた」[19]とする。

昭和20年３月には、貴重書の疎開が行われている。上記追加目録は、あるいはそうした事態に備えるものであったか。『東北大学五十年史』には疎開状況について具体的な記述がある。

『古代宗教論』『古代宗教論余』（東北大学附属図書館蔵）

附属図書館に蔵する貴重な典籍も、地下室に収めただけでは安心がならず、加美郡中新田町や六郷村また大衡村の旧家の土蔵へ疎開して危険をふせごうとした。法文学部などではもつぱら図書が疎開の対象とされ、栗原郡文字村、志田郡の三本木町、黒川郡の吉田村などへどしどし送りこんだ。

第一部通史第五編戦時下時代第五節授業の全面的停止と疎開　p460

貴重本と西蔵大蔵経は、一応書庫の地階に移して空襲の被害から護ることになり、側溝にコンクリートの防護壁が設けられた。しかし書庫自体が爆撃に堪えるか否かが問題で、結局貴重本と西蔵大蔵経は田舎に疎開することになつた。疎開先についていろいろ調査が行われた結果、貴重本の方は木箱詰にして厳重な封印をし、　第二部部局史第一九編附属図書館第三章戦中・戦後時代第一節戦時中の図書館 p1701

「本館第四代司書官　重久篤太郎先生を憶う」矢島玄亮（『木這子』第８巻第４号（通巻32号）　東北大学附属図書館　昭和59年２月）によると、一般図書は書庫で守る方針としたが、国宝は金庫に入れて地下室に、西蔵大蔵経と別置本は疎開させた。重久篤太郎[20]は、昭和16年６月より昭和24年８月まで司書官を務めたから、在任中は次々と非常事態への対応に追われたのであろう。

何を最優先すべきかという点においては、東北大学附属図書館では別置本が選定されていたから、方針は明確であった。さらに国宝は別格として、手許で護ることとしたのであろう。疎開にも危険性がともなう。貴重書は、まず地下書庫で護ることになったが、コンクリートの防護壁まで立てられたから、当面問題となるのは湿気による劣化・損傷で、これは時に致命的なものになる。矢島氏の回想によれば、昭和16年12月８日の日米開戦後、戦時体制に入り、本部の防衛計画大綱に準じて図書館でも実施細則を定め、書庫は書庫係で対応することになり「地下室南側溝の板の上に土嚢を積んで塞いだり、書庫の窓から電灯の漏れないようした」[21]。全体に書庫の風通しは悪くなったことであろう。附属図書館事務で『湿度調（昭和十七年六月起・内題「書庫地階別室湿度調」）』が保管されている。これによると、六月十五日に湿度計は設置された。七月十日には、

『湿度調』（東北大学附属図書館 事務保管）

晴天が続いたので換気を行っているが、「南側爆風除ノ土嚢ノ間隙少キ故出来ルダケノ空間ヲ作ル」とある。その後も、掃除や換気の記録が続く。昭和二十年三月二十七日の欄に別置本疎開の記録がある。三月七日～十二日の間に箱詰が行われた。二十四日午後に荷造が完了し、十六箱[22]に納められた別置本は三月二十五日午後一時半に附属図書館を発った。別置本の疎開に当ったのは、矢島氏と小使二名であった[23]。

貴重な書籍・資料を保管していたのは、図書館だけではない。大学では、教員の保管していた書籍については学部で疎開処置を行った。法文学部で疎開作業にあたった桑原武夫は、その状況についてかなり詳しい記録を残している。

> 中央図書館の蔵書は大学本部が責任をもつが、法文学部の研究室にある多数の個人蔵書については学部で考えなければならない。（中略）問題は輸送である。たまたま東北六県の統監という地位にあった丸山鶴吉[24]氏が学問に理解があり、大型トラックを五台一日だけ貸そうという話がまとまった。文字村は仙台の北、直線距離にして百キロある。汽車ならば東北本線を北上し、石越で下車、細倉鉱山行きの栗原鉄道という軽便鉄道で岩ケ崎下車、あと徒歩で三里半である。
>
> 「文字村疎開記」（桑原武夫集10　岩波書店1981年２月）P389
>
> （初出『世界』1980年12月）

最も問題となったのは、移動手段であった。厳選された貴重資料しか疎開させることができない。貴重性の判断は、所蔵者たる教員の判断に従ったようである。

> そこで発送は七月三日早朝と定められ、各教官はトラック五台に積める量ということを考慮して、貴重なもののみを厳重に梱包の上、当日早朝までに学部の正面入口まで搬出しておくことという廻章をまわすことにした。（中略）荷物は一八七個集まった。これがすべて貴重図書なのかと思った。ある助手が頑丈な重い木箱を持込んだので聞いてみると、雑誌『思想』の揃いであった。もちろん貴重書か否かは本人の主観によってきまることである。（中略）五台のトラックで十分であった。　同上 P389-340

分量の上限があるという条件下に、各自がその主観で優先すべき「貴重図書」を選ぶという方法である。組織的ではなく、その選択に異論がでることは当然あり得るが、結果的には分量の上限が十分でかつ疎開に成功したため、問題は表面化しなかった。書籍の貴重性の判断に際しては、分野や条件が著しく異なり合意が形成し難い場合には、この方法は実際には合理的方法であるのかもしれない。ただし、数量的条件が候補の極端な増大を抑える効果が必要であり、上限が十分でなかった場合は、より貴重な資料を焼失させることになったという批判があり得た。桑原が疎開書籍とともにようやく到着した現地で夜になり休んでいる頃、仙台では空襲が始まっている。疎開に成功したのは僥倖であったともいえる。東北大学でもいくつかの建物が被災したが、図書館は閲覧室・書庫ともに守られた。

> 昭和二十年七月十日午前七時の仙台駅前。すべては灰燼に帰した。（中略）六時前から家をあとにして、まず東北大の構内に着いたのが六時半頃だったろうか。自分の研究室のある建物を遠くから見ると幸い無事らしいことがわかったが、（中略）第二研究室棟を見ると、窓から黒煙がふき出している。上のほうまで消火ホースが、三、四本這い上っている。ようやく三階へたどりつき、手前から順に河野さん、土居さん、桑原さんの室を見て行く。どこも煙と灰がうずまき、床は水びたしだ。工兵たちが焼け残った書物を窓から投げ下ろしている。とても手を出せたものではない。
>
> 「空襲前後―東北大、法文学部の思い出―」有永弘人
>
> （『仙台あ・ら・かると』Ｑの会編　昭和43年）p29-30
>
> 法文の三階の四室は天井をぶち抜かれ、中の書物は丸焼けに近かった。前記のように、土居、河野、桑

原の三先生の室と、廊下をへだてた福井さんの室がやられたのだった。　同上 p35

法文学部第二研究室三階の東洋芸術史研究室が焼夷弾に見舞われ、福井利吉郎教授室も焼けたため研究資料が灰になり、『臨顧愷之女史箴巻』関連資料である絹地補修識別図も失われた[25]。個人の蔵書についてみれば、たとえば土井林吉（晩翠・第二高等学校教授）の蔵書は疎開を完了することができず、大半を焼失させてしまった。

此書〔内田魯庵が関東大震災時の書籍被災を記した本〕もわが珍蔵の一であつたが、七月十日の爆撃で三万巻ばかりと共に焼けた。五十年に亘り心をこめて集めた典籍中疎開して助かつたのは五分の一に過ぎぬ。（中略）私は古今図書集成、四部叢刊、大蔵経等の大物をまづ疎開させたが、形勢が迫り、運輸機関が殆んど停止されたので、残る重要の書籍及び身廻りの蔵書とも曰ふべきものは、土蔵に容れるより外は無かつた。それが直撃弾で全滅した。

「蔵書の焼滅」（1945年）（『晩翠放談―七十七年を語る』土井林吉　河北新報社 昭和23（1948）年）p111

宮城県図書館蔵書の被害も大きかった。常盤雄五郎氏は梱包などは略式にして疎開を急ぐべきであったとする。

宮城県図書館は不幸戦災にかかり、全館レンガ造り三階建の書庫は、その蔵書と共に烏有に帰して、僅かに疎開により免れた五千冊ばかりが残つた。（中略）古い本はまたと求め得られないものだから、面倒なら全部紙包に縄掛けでもよいから疎開して欲しかつた。それをば、ズックで全部を包み、馬皮の丈夫な帯を十文字にして錠をかけた、もつたいないほどのヤナギ行李を新調して本を入れ疎開した訳だから、容易なことではない。だから十四万余冊もあつた本が、僅か二十分の一足らずしか運べなかつた次第で、

「小西文庫と飯川氏二代」（『本食い蟲五拾年』常盤雄五郎　仙台昔話会　昭和31年）p12-13

県図書館ではそれぞれの専門家に何を疎開すべきか諮問してあったということであるから、非常時としては丁寧な手続と作業が行われたといえよう。常盤氏は、宮城県図書館の古典目録にふれて、

戦災前の宮城県図書館には、新古の図書が十数万冊も蔵せられていた。新典より古典が非常に多かつた。三階建書庫の第一階は新典、第二、三階は皆古典であつた。古典には、養賢堂〔仙台藩校〕旧蔵本・旧藩から県庁引継保管転換本を初め、大槻文彦先生館長当時令写本・諸名家からの寄贈本・購求本等夥しいものであつた。

「宮城県図書館　古典目録の回顧」（『本食い蟲五拾年』常盤雄五郎　仙台昔話会　昭和31年）p223

この書目の特色としては、更に書名の頭に、×印は養賢堂旧蔵本、◎印は郷土人の著書、○印は郷土に何か関係ある図書というように、三種の目印を附して、郷土史料捜索上の便を図つたものであつた。若し同館疎開本の当事者が、誰であつたとしても、少くもこの目印のある図書ばかりを拾つて呉れて疎開したならば、現在に幾倍する許多の郷土史料が残された筈である。　同上 p226

常盤氏は上記古典目録の編纂にあたっていたから、典籍の由来・貴重性が容易に判別できるように工夫したにもかかわらず、それが結果的には生かされなかったことが、いかにも無念に思われたのであろう。

東北帝国大学では疎開によって典籍は護られたが、利用には当然支障が生じた。そして「閲覧できない蔵書」は、疎開本ばかりではない。

地図・統計書等はもちろん敵性図書は官報に掲載され、その都度処置が指示され、理学部N講師の研究室に赴き地図地質図統計書等に閲覧禁止のラベルを貼付、書庫分は同様に処置して地下室に別置した。一年位たつて文学部K教授から研究に支障が生ずるとの申出で特別閲覧許可という規程を急設したがこれはこれきりで終った。　「本館第四代司書官　重久篤太郎先生を憶う」矢島玄亮

（『木這子』第8巻4号（通巻32号）　東北大学附属図書館　昭和59年2月）

東北帝国大学では書籍の廃棄に至らなかった[26]が、学生の知識に空白が生じてしまったらしい。

学生たちに、君らも河上肇の本など大っぴらに読めるようになったね、といったら皆キョトンとしている。法経の学生も河上という名は全く知らぬのだ。

「敗戦前後」（桑原武夫集４　岩波書店1980年７月）P205
（初出『新潮』1954年９月）

そして「こういうおろかなことは、戦争とともにおわつたわけではなかつた。つぎは占領軍である」[27]。文化財危難の時代は続く。「敗戦直後頃狩野本〔＝狩野文庫〕をそっくり米国へとの話を耳にした」[28]と矢島氏は回想している。こうした風評は当時多かったことと思われるが、杞憂とばかりもいえない。貴重図書のいくつかは、こうした愚行にさらされた過去を持っている。

終戦後、附属図書館では復旧作業が進められた。『湿度調』昭和二十年十月二十三日の欄には、「ケーベル文庫本ノカビヲ払フ」とある。ケーベル文庫は、本館所蔵の Raphael von Koeber（1848～1923）の旧蔵書である。十月二十九日は晴天であった。「爆風除ヲ取外シタルタメ窓ヲ全部開クケーベル文庫本ノ間隔ヲ広メ風通ヲヨクス」「金庫内ニ蔵置ノ国宝及貴重本ノ乾湿ヲ検ス異常ナシ」とある。金庫内で守った本は国宝だけではなかった。『国宝貴重書管理簿』（東北大学史料館所蔵　図/48）[29]昭和二十年六月五日の欄には「臨顧愷之女史箴巻金庫（地階別室）中ニ蔵置ス」とある。

疎開していた別置本も無事に図書館に戻る。この時も付き添ったのは矢島玄亮氏と小使二名[30]であった。『湿度調』昭和二十一年七月十一日の欄には「別置本　書庫一階へ移シ終ル」、『国宝貴重書管理簿』昭和二十一年七月十五日至七月十八日の欄には、「疎開別置本六六二部（点検調査ヲ遂ゲタリ）（和漢書之部）」とある。附属図書館事務で保管されている点検用の別置本目録[31]には数種類の記号があり数度[32]の点検に使用したものと思われるが、「右目録中　疎開文献　六五一部　三一九〇点　追加十一部　五九点　合計六百六十二部　三千二百四十九点」の書込【写真】がある。

『国宝貴重書管理簿』昭和二十三年七月二十一日の欄には「別置本点検（和漢書）」「異状ナシ」の記述がある。『国宝貴重書管理簿』昭和二十三年十二月二十三日の欄には「国宝移転」とあり国宝２点と『臨顧愷之女史箴巻』を地階から書庫一階に移したことを記している。『国宝貴重書管理簿』には、見学等についての記述もある。昭和二十五年二月二十五日には国宝２点と『臨顧愷之女史箴巻』の名が記され「進駐軍教育関係者一行五名」とあるのは見学であろう。この時期は月に一回程度国宝の点検を行っている。昭和二十五年十二月廿七日の欄には「会議室で国宝二点の虫干を行う」とある。

『別置本目録』書込部分
（東北大学附属図書館 事務保管）

旧教養部図書について（旧制第二高等学校図書等）

終戦後、大学の体制は大きく変えられた。附属図書館も例外ではない。武内〔第二代〕館長以来、図書館長は文科系の教授から出る慣例になつていて、昭和22年３月就任した木村龜二館長が法科系では最初であった（『東北大学五十年史』p1705）。昭和24年５月、学制改革にともない東北大学は第二高等学校などを包摂した。重久「司

書官」退官後は吉岡孝治郎事務官が、附属図書館「事務長」として任命された（『東北大学五十年史』p1708）。こうした変化の中で、制度的に明確化された変更は見えやすいものであるが、慣例等の変更はその影響が大きいにもかかわらず、見えにくく記述も困難なものとなる。法文学部創設時からの教員は次第に大学より去り、書籍に関しても購入時の情報も感情も忘れ去られ、貴重性の感覚も揺らぐことになる。

ここで、第二高等学校の書籍の管理状況について見てみよう。現在貴重図書となっている『竹林抄』（宇-1044）はもと第二高等学校蔵書で貴重書として扱われていた。この図書を再発見した峯岸義秋（第二高等学校・東北大学教養部教授）の同書解説からその事情ともに当時の第二高等学校における図書管理状況をうかがうことができる。

> 昭和十三年、夏休みに入ったばかりのある日、私は命ぜられるままに第二高等学校の第二書庫[33]の和書を整理していた。その頃は教授であっても一週間ぐらい当該学科の図書を、原簿に照合して整理することになっていた。さて、その担当書架の中でどうしても一冊見つからなかったのが、この竹林抄であった。（中略）改めて表紙をつけ、帙に入れ、別置貴重本として取扱いを異にした。その後、（中略）疎開してあったが、富沢分校時代〔東北大学第一教養部〕に取戻し、一時ゆくえが危ぶまれたが、このほど川内に移転〔教養部の川内移転〕して、旧二高図書を整理中見出されたのである。ちなみに、この本は大正十年春ごろ仙台市東一番丁の無一文館から購入、金壱円と記された帳簿を見た記憶がある。
>
> 「竹林抄解説」峯岸義秋　（「東北大学川内分校本　竹林抄　―その解説と本文―」峯岸義秋・町田三郎『文科紀要』7　東北大学教養部　昭和36年３月）

現在同書に貼付されている第二高等学校図書ラベルには、「大正10年６月16日〔受入〕　昭和十三年五月修理」とある。なお、このラベルは印刷で「昭和」とあるので、昭和に入ってからあらためて整備したものであろう。野口明（第二高等学校校長　昭和18年９月着任）の回想からも、第二高等学校書庫の整理の行き届いた状態をうかがうことができる。

> 我々の学生時代〔野口は大正２年９月第二高等学校文科乙類入学〕は書物も安かったし、図書館利用の習慣も乏しく、なるべく自分で買う気風であった。教授達も古い人は蔵書家が多くまた買う能力もあった。しかし段々と教授も学生も懐具合は悪く、従って図書館の機能も一層重要視されて来たのは当然である。終戦の頃、二高の図書は約七万と言われたように思う。戦前は夏休に教授達が協力して、書庫を整理する美風が残っていた為か、東西の権威ある書物が、行儀よく並んでいるのは頼母しかった。殊に和漢書は、一々木製の箱或は枠に入れられてそれが整然と書棚にある姿は、いかにも書物を大切にするたしなみとして尊く思われた。　『追憶の二高』野口明　里文出版 平成13（2001）年 「55　図書館」p195-196

野口の言う「木製の箱或は枠」と思われるものは、現在はほとんどが通常の帙に取りかえられたが、一部はなお旧教養部古典籍の保管に用いられている【写真】。教授たち自身によって図書の点検を行う方法[34]は、効果と同時に負担も大きかったことであろう。戦時中、貴重図書は疎開させていたようである。

> 二高歴代校長の写真や油絵は、（中略）二高の貴重図書類と一緒に、県北辺地の長崎村に疎開しておいたので、助かつた。疎開後、一週間目位で仙台空襲となつたのであるから、まつたくあぶないところであつた。
>
> 『東北大学五十年史』第三部包摂校史第一編第二高等学校第一章通史第六節戦時下の時代　p1782

旧教養部古典籍に使用されている木製ケース。
同様の紙製のケースも使用されている。

第二高等学校図書館の書庫は空襲で罹災したものの焼け残り、戦後は農学部図書室となった。戦時中第二書庫屋上には高射砲が据付けられていたという。書庫に関する記録を抄出する。

図書館第二書庫の屋上に軍が据付けた高射砲を二、三発打つたので、仙台空襲最後の頃になつて二高が狙われたのだという説がある。

『東北大学五十年史』第三部包摂校史第一編第二高等学校第一章通史第六節戦時下の時代　p1782

昭和28年以来〔農学部〕図書室として使用していた鉄筋コンクリート造りの書庫は旧制第二高等学校時代のもので、屋上が太平洋戦争末期高射砲陣地だったことと、空襲で罹災した建物であったため損傷がひどく、　『東北大学農学部五十年の歩み』東北大学農学部創立50周年記念事業実行委員会記念誌部会編

東北大学農学部同窓会　平成９年　p296

1950年に北六番丁に移転した。1952年、現在の建物、旧二高の焼残った２階建と３階建の書庫（約100坪）を代用することとなり、今日に至った。

東西にせまく、南北に長い矩形のため夏は午前、午後を通じて直射日光がさし込み、冬はその恩恵に浴さない。　「農学部図書室だより」

『図書館通信　東北大学附属図書館月報』16　東北大学附属図書館1965年７月　p64

昭和36年度版別置本目録には、第二高等学校旧蔵書は含まれていない。また、第二高等学校旧蔵書は特別本・別置本と二段階に分けて貴重図書を選定する方法も行われていない。これらの問題については別の機会に述べる。

昭和36年度版別置本目録の刊行

戦時中も継続された狩野文庫の整理作業は、昭和29年一応の終了を見る。戦時中は、図書の購入が少なく、その分を整理作業に向けることができるかと思われたが、実際には無理があった。戦後も作業場所の確保にさえ苦労があった。

〔狩野文庫〕第二期分は18年３月末日で会計上の手続は終った。全部で二〇六一四点。まず館長室隣の部屋に置いて整理することとした。当時戦争末期にかかり、洋書の購入はなく、国内での図書購入も殆んどなく館員に余裕ができ、この整理に好都合と思われたが、目録作業は誰にでも簡単にできるものではなく、且空襲、疎開ととかく騒々しい中で結局和目〔＝和漢書目録〕係の仕事となり、

矢島玄亮「狩野文庫とともに」 p７

敗戦直後、戦災をうけたある学部では教官会議の室さへない。そこで本館の狩野本整理室が狙われた。（中略）他に移すべき部屋もないので結局一期本の後へ続置することとなった。時に26年、然し狩野本書架は満杯である。故に前後に詰め新に三尺書架15本を入れた。図書の運搬には全職員と人夫五人とで手送り、三日を費し、図書は書架に横積みした。（中略）翌27年、文学部の助手、院生二人と和目掛三人でこの二期本分類に入った。（中略）終に昭和29年８月８日、待望の二期本整理は一応終了した。（中略）残ったのは、別置してあった古文書、絵葉書、地図、暦、ちらし等の特殊資料である。　同上ｐ８

整理作業の過程で、別置本・特別本選定の作業が行われた。「〔昭和28年〕10月21日．第１狩野本ニ継クベキ別置書ハ別置扱トス。仏庵臨帳ノ如シ。又特別本ト認ムベキモノ、例ヘバ自筆本ナドハ第１狩野本ノ特別本ニ準ズ」（第２狩野文庫整理日記[35]抜すい）[36]。方針としては、それまでの選定に準じて行われ、別々に受け入れた一連の資料をあわせて別置本とすることもできたが、資料の性質も均質ではなく、基準に迷いが生じることもあったようである。

またこの時期、東北大学附属図書館としては別格の貴重図書を受け入れている。このひとまとまりの古写経は島田利八氏の旧蔵で、個々の名品については反町茂雄氏の『一古書肆の思い

出　3・4』（1988年・1989年）に紹介されているから、知る人も多いことであろう。昭和36年度版『東北大学附属図書館別置本目録』「凡例」には「新増の古写経（板経を含む）については、既に「古写経目録」として昭和二十八年六月六日油印発行し、各々順序して一括別置してあるので、これが挿入は「和漢書別置本目録」〔昭和11年刊行〕の扣番号を超過する関係上、しばらく「古写経目録」に従つて記号を古１以下古38までとした。」とある。別置本の函架番号は「阿 -8-11」のように構成されている。「阿」が函、「８」が架、「11」が号である。最後の番号（号）は通し番号になっているが、『別置本目録』の分類ごとに番号に間があけてある。これが扣番号で、別置本の増加に予め備えたものであるが、古写経を想定外に多数受け入れたため、扣番号が不足する事態になったのである。『古写經目録』（東北大學附属圖書館昭和28（1953）年６月　謄写版）は古写経（古１～古38）38点の解題目録である。

東北大学創立五十周年式典 図書館見学風景
（東北大学史料館所蔵）

昭和11年『和漢書別置本目録　未定稿』編纂に携わった矢島玄亮氏は、別置本目録増補改定の準備を進めていた。氏が書入をした昭和11年版目録は矢島文庫に保管されている。一方、洋書についても謄写版で『別置本仮目録　洋書』（東北大学附属図書館　昭和29年２月・謄写版）が作成されているので、この時期には目録刊行の準備がなされていた[37]のであろう。しかし、原稿が用意されていたにもかかわらず、容易には目録刊行に至らなかった。矢島玄亮氏はその事情を次のように記す。「私は昭和29年に和漢書別置本目録の原稿を作つた。此は従来の和漢書別置本に増加と訂正を要するものが多くなつたこと、残部の少いことを理由として上申した所許可を得たが、予算の都合で出版には至らなかつた」[38]。その後雑誌『文芸研究』[39]に掲載しようという計画が立てられたがこれも頓挫した。

昭和31年常盤雄五郎氏が急逝した。常盤氏は東北大学附属図書館所蔵の文書を紹介する著書を計画[40]していたが実現しなかった。昭和32（1957）年６月22日、東北大学創立五十周年記念式典が行われた。「本学創立五十周年記念は盛大に行われ、その記念誌も発行された。それと同じ年輪を刻んだ本〔狩野〕文庫の目録がない……」[41]と矢島氏は慨嘆する。

「其後この原稿に、洋書の貴重本目録も併せ、書名を別置本目録として出版しようと上申、許可されて漸く出版された。序例に出版の由来、記述の方法等々いろいろ述べられてあるが、内容についてはまだまだ訂正を要するものが頗る多い。」[42]こうして昭和36年度版『東北大学附属図書館別置本目録　増訂稿』が刊行された（奥付は昭和三十七年三月印刷発行）。はじめに述べたように、この目録の内容体裁は昭和11年目録に極めて似ている。しかし、昭和11年目録が、図書館の事業として行われたのに対して昭和36年目録は矢島氏等の個人的な働きに負うところが大きかったように思われ、作成態勢の面では相違するところがあったと言える。狩野文庫整理作業でさえ「常務の片手間」（矢島玄亮「狩野文庫とともに」p６）に行われ、館長が交代してみると「通常業務の間にやるという含みは前と同じであろうが、館長の声掛りであったのと否とでは非常な隔たりがあった」という状況下で文庫整理が休止状態になったということであるから（矢島玄亮「狩野文庫

とともに」p７）、小規模とはいえ貴重図書目録改訂版刊行にも相当な困難がともなったことと推測される。

この目録もまた「増訂稿」と称している。記述内容が学術的にはなお検討を要するということもあるが、そればかりではない。「はしがき」には、残された課題が記されている。「もとより、この新目録は完璧というにはほど遠い。新学制によつて本学に包摂せられた旧第二高等学校、仙台工業専門学校等諸校の旧蔵書にふくまれている貴重書や、前回の目録にも除外した理学部数学科備付の和算関係の貴重書、その他狩野本の一部で現在整理中の貴重な特殊資料など、今回の増訂稿から除かれたものは決して少数でない」。また、「正誤表」には「匆々の間印行を急いだので誤植を遺したが主なものだけを掲げ不日再版をまつて全面訂正することとした」と記されている。原稿作成から印刷までに間が開き過ぎると、作成者の記憶が曖昧になり間違いが起きやすくなる。予算の確保には時間がかかっても、そのことが決定してから刊行までにはかえって余裕がなく、丁寧な校正ができないという事態もありがちなことである。

再度の改訂が期待されていた。しかし、その後別置本をめぐる状況は大きく変化することになる。これらについては稿を改めることとしたい。

※引用にあたって、原文の漢字の字体・活字の書体を改め、傍線・ふりがな等は省略した場合がある。また「，」「．」は「、」「。」等に改めた場合がある。〔　〕内は筆者の推定による補記である。文献の刊行年は原則として奥付等に従い、西暦・元号の統一はしていない。付表の古典籍の漢字はなるべく原文に近いものとした。

注

1 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（一）　―昭和11年版『和漢書別置本目録　未定稿』刊行とその周辺―」大原理恵　『東北大学史料館紀要』８　東北大学史料館2013年３月
2 「狩野文庫とともに」『図書館学研究報告』16　東北大学附属図書館　昭和58年12月　p20
3 「理学専門の学士でありつつも、儒教仏教など東洋哲学に深い造詣をもち、高雅なる人格をもつて当時教育界に一異彩を放つ人であつた。」（『東北大学五十年史』p90）
4 「唐本商の変遷」田中慶太郎（文求堂）（『紙魚の昔がたり』反町茂雄編　臨川書店 1978年（訪書会叢書 第１編（訪書会昭和９年刊）の複製）p158　には、かつて〔明治30年代後半頃〕大学等では漢籍地誌類の蒐集に務めていたことが回想されている。
5 「楊舟 東川徳治年譜考」江戸恵子　法学志林 92－４　法政大学法学志林協会1995年３月（『支那法制史研究』（アジア学叢書 61）大空社　1999年に修訂再録）「東川徳治と『典海』編纂の経緯」山根幸美　『汲古』27　古典研究会 編　1995年６月　等参照
6 「狩野文庫とともに」矢島玄亮　p６　矢島氏は昭和７年から後任として嘱託され、狩野文庫の整理を担当。
7 『一古書肆の思い出　１修業時代』反町茂雄　平凡社 1986年　p386
8 薩摩藩士・漢学者。維新後諸官を歴任。貴族院議員。小牧健夫の父。小牧健夫は東北帝国大学においてドイツ文学講座を担当するはずであったが、小宮豊隆担当予定の比較文学講座の開設が実現しなかったため、講師として小宮を輔佐し、昭和７年九州帝国大学法文学部に移った（『東北大学五十年史』p1180）。
9 大正12年７月没。國學院大學教授。折口信夫の師としても知られる。『標註　土佐日記』（丁 B1-6-3）は折口から三矢に贈ったものであることが三矢の識語に記されている。
10 「東北大学附属図書館所蔵「小野隆庵旧蔵書について（医学稿本など）」」高橋章則（シリーズ　貴重図書22）『木這子』第26巻第２号（通巻95号）　東北大学附属図書館　平成13年９月　参照

11 『北京風俗図譜』１・２　内田道夫編・［青木正児原編］（東洋文庫 23・30）平凡社 1964年『北京風俗図譜』内田道夫図説・青木正児図編　平凡社 1986年等参照　東北大学史料館には、作成時の関連資料として［留学教官購入図書精算関係書類］図書館 /14 （青木正児自筆書簡添付）が保管されている。
12 常盤雄五郎（明治20年―昭和31年12月５日）は明治45年より２年間内閣文庫勤務。『本食い蟲五拾年』常盤雄五郎　仙台昔話会　昭和31年12月 「内閣文庫のこと」参照。その後大正２年より宮城県図書館勤務、大正12年より東北帝国大学附属図書館勤務。
13 『本食い蟲五拾年』常盤雄五郎　仙台昔話会　昭和31年 「仙台叢書居士」p89
14 『本食い蟲五拾年』常盤雄五郎　仙台昔話会　昭和31年 「仙台叢書居士」p90。仙台叢書居士とは伊勢の出版した仙台叢書にちなむものであるが、これは明治26年仙臺叢書出版協會刊『封内風土記』等の仙台叢書であり、大正に刊行された仙台叢書とは別のもの。
15 昭和21年５月まで在任
16 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（一） ―昭和11年版『和漢書別置本目録　未定稿』刊行とその周辺―」大原理恵（『東北大学史料館紀要』８　東北大学史料館2013年３月）p82参照
17 『古代宗教論』乙 B1-15『古代宗教論余』乙 B1-16　と思われる。なお、これらは『東京学士会院雑誌』十編之四・十編之七（明治21年）に掲載されたものの稿本か。ともに、『陽春廬雑考』（小中村清矩　吉川半七　明治30年）所収。
18 「狩野文庫所蔵の本草綱目に就て」岡田要之助『図書』岩波書店　昭16年７月
19 「狩野文庫とともに」矢島玄亮 『図書館学研究報告』16　東北大学附属図書館　昭和58年12月　p17
20 「重久篤太郎 略年譜・著書論文目録抄」井田好治編（『英学史研究』17　日本英学史学会 1984年10月）参照。日本における英学史を研究、『日本近世英学史』（教育図書　昭和16年）等の著書がある。
21 「本館第四代司書官　重久篤太郎先生を憶う」矢島玄亮
22 この箱は、西蔵大蔵経目録を収めていた箱の転用。「私の昭和史―東北大学附属図書館の戦中・戦後」矢島玄亮 （『図書館雑誌』83巻８号　1989年８月）参照。
23 「本館第四代司書官　重久篤太郎先生を憶う」矢島玄亮
24 『七十年ところどころ』丸山鶴吉 昭和30年　には、東北地方総監時代の回想が含まれる。東北帝国大学総長北条時敬は妻の父。
25 『東北大学五十年史』p1276。なお『五十年史』は『臨顧愷之女史箴図巻』は文学部に現蔵と記述。
26 『東北大学五十年史』第二部部局史第一九編附属図書館第三章戦中・戦後時代第三節所蔵本の受難記
27 『東北大学五十年史』第二部部局史第一九編附属図書館第三章戦中・戦後時代第三節所蔵本の受難記 p1712
28 「狩野文庫とともに」矢島玄亮　p11
29 昭和20年６月～31年４月　東北帝国大学附属図書館
30 「本館第四代司書官　重久篤太郎先生を憶う」矢島玄亮
31 白紙を綴じ込んだ、矢島氏がＥ本（注１前稿 p84参照）と称する昭和11年10月刊『別置本目録』である。
32 うち一回は「昭和十九年八月三日点検　現在スル印ナリ」の書込がある時のもの。
33 『二高を語る』（阿刀田令造　第二高等学校共済部 昭和12年）には昭和十二年十月一日現在の第二高等学校平面図が添えられており、当時の第二書庫の位置を確認することができる。
34 東北大学附属図書館の図書点検については「東北大学附属図書館における図書点検」相馬正基（『図書館学研究報告』３　東北大学附属図書館　昭和45年12月）参照
35 「第二狩野文庫整理メモ」（昭和18年６月25日～）（東北大学史料館所蔵　図書館 /49）が現存。
36 「狩野文庫について―在館33年の思い出―」矢島玄亮『MAUL　宮城県大学図書館協会会報』27 1966年 p16
37 洋書の貴重図書目録については「『増訂稿』覚書　―洋書特別本とは何か―」小川知幸（『東北大学附属図書館本館所蔵　新訂貴重図書目録　洋書篇』東北大学附属図書館　2004年）参照
38 「狩野文庫について―在館33年の思い出―」矢島玄亮　p13
39 矢島氏は同誌について「本学〔東北大学〕文学部国文研究室の機関誌」とするが、正確には日本文芸研究

会機関誌である。同会事務局に別置本目録刊行企画に関する記録の有無について問い合わせたが、現在のところでは存在を確認できない、とのことであった。なお、筆者は同会会員である。

40 「死去の前夜著者は私の家で、次の著作についての抱負をもらしてくれた。それは、東北大学附属図書館にある「狩野文庫」以下の厖大な文書の紹介である。」（『本食い蟲五拾年』常盤雄五郎　仙台昔話会　昭和31年12月　「追録」岩間初郎）

41 「狩野文庫とともに」矢島玄亮　ｐ９

42 「狩野文庫について－在館33年の思い出－」矢島玄亮　p14

付表　昭和36年度版目録において追加された別置本 （「附」は省略）

狩野文庫９点	その他62点
中国古刊　３点 本草綱目　阿三－六四＊ 重刻元本題評音釋西廂記　阿三－六五＊ 皇明輿地之圖　阿三－六六＊	**古写経　仏書古写本　５＋38点** 乞戒導師作法　宇八－－〇－三＊ 結縁灌頂三摩耶戒作法　宇八－－〇－四＊ 大疏百條第四聞書　宇八－－〇－五 新池抄　宇八－－〇－六 教化集　宇八－－〇－七 （古写経・資料名省略）古一～三八 ※古一九は日本古刊
	古写本　２点 大廣益會玉篇（倭玉篇）　宇八－－〇四二 韻鑑　宇八－－〇四三
	原本稿本　５点 契冲阿闍梨尺牘　宇一二－－二八六 東大寺御寶物搨本張込帖　延三－－三四一＊ 漱石日記帳　延三－－三四二 「無何有洲」七草集　延三－－三四三 狩野文庫目録　延三－－三四四
	画図　１点 臨顧愷之女史箴巻　延四－－五〇五　小林古径前田青邨模寫
西鶴本及浮世草紙　３点 好色一代女　宇四－八二五　寫本・尾崎紅葉大橋乙羽舊藏 元無草　宇四－八二六　寫本 好色文傳授　宇四－八二七＊	**西鶴本及ビ浮世草紙　３点** 好色一代女　延四－－八〇一　覆刻　神谷鶴伴刊 好色一代男　延四－－八〇二　覆刻　神谷鶴伴刊 好色五人女　延四－－八〇三　覆刻　神谷鶴伴刊
	諸種刊本　１点 神天聖書　延四－－九〇四
	諸種写本　１点 源氏物語　延四－－九四六＊　知恩院宮良純親王等寫
	文書　５点 西園寺家文書　延五－－九六九 湯目家文書　延五－－九七〇 村上和泉守等ヨリ神野又四郎宛書状　延五－－九七一 慶長年永代田畠賣券　延五－－九七二 倉持文書　延五－－九七三
秘本　３点 繍像第一奇書鐘情傳　宇六－九九五 天地陰陽交歡大樂賦　宇六－九九六 譯解笑林廣記　宇六－九九七	**秘本　１点** 宇津山小蝶物語　延六－二〇〇一＊

＊は「別置本目録追加」（謄写版　昭和20年１月27日）収載資料。ただし同追加目録に収載されている『古代宗教論』（小中村清矩）は、36年度別置本目録には収載されていない。